

## 小規模校における「学び合い」による授業改善

研究代表者 和歌山大学教職大学院 中山 眞弘  
 共同研究者 有田川町立石垣中学校 上道 賢太  
 有田川町立石垣中学校 全教員

## 1. はじめに

全国的に児童・生徒数の減少が進んできているが、和歌山県においては、児童・生徒数の減少が著しく、多くの学校で小規模校化が進んでいる。図1は令和元年度学校基本調査の速報値ではあるが、このように和歌山県の小学校・中学校の児童生徒数は近年、最小値を推移する結果となっている。一方、山間部の学校を中心に統廃合も一時進められたが、通学距離の限度等からこれ以上の統廃合は難しくなっている。児童生徒数の減少に伴い、学校の小規模化が進むと同時に、複式学級や少人数での授業改善が急務となっている。中でも中学校においては、複式学級での授業は教育課程上難しく、少人数での授業が営まれているのが現状である。その際、子どもたち同士の意見や考えを交流し深めることが難しいという課題があげられる。生徒数が少ないため、多面的・多角的な意見交流が難しく、いわゆるアクティブラーニングが実践しづらい環境にあるとも言える。また、小規模校ゆえに教員が少なく、学習指導力の向上をめざした授業研究を進めにくいという課題もある。

このような課題を受け、有田川町立石垣中学校では、昨年度に引き続き授業改善の視点を共有し全教師が年に一度以上「学び合い」を取り入れた研究授業を実践し、個人の授業実践力を高める取り組みを行った。各教科を担当する教員が1名のみの配属となっている中で、教科の枠を超えた視点で改善テーマを共有して全教員が授業を行うことで、授業改善に結びつけていくことができ、目指す授業を支える学習指導の基礎基本も共有できると考える。

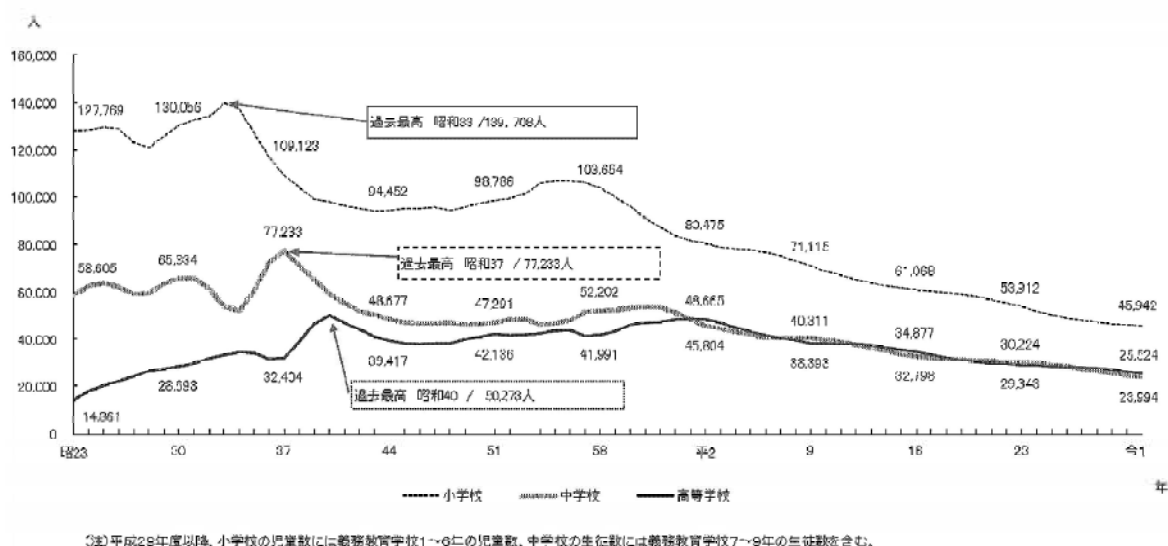


図1 小学校・中学校・高等学校 児童生徒数の推移

## 2. 学校概要

有田川町立石垣中学校は、有田川中流の農村地帯に位置する小規模校である。地域は相互扶助の気風が高く、学校教育に対しても協力的である。また、生徒は明るく実直で、まじめに取り組む姿が見られ、学力の定着度も比較的が高い。

近年、生徒数が減少する中、集団活動を工夫しながら活性化を目指している。また、地域行事の「あじさい祭り」「ふれあい交流会」など地域の一員として活躍する場も設けている。



【石垣中学校の外観】

### 【研究主題】

「主体的に学び合う授業の創造」

～単元での学びを豊かにするために～

### 【生徒数】

学年	1 年		2 年		3 年		計	
生徒数（人）	男子 6	女子 7	男子 3	女子 3	男子 7	女子 6	男子 16	女子 16
計（人）	13		6		13		32	

### 【職員数】（人）

学校長 1、教頭 1、教員 10（内非常勤 3）、養護教諭 1、職員 5 計 18

## 3. 活動内容

### 3.1. 研究協議の視点統一

研究協議の方法については、これまで進めてきたワークショップ型の協議を引き続き行うことにした。教科の枠を超えた協議を進めるため、常に授業を参観する 2 つの視点を設け、その視点について協議を深めるようにしている。この 2 つの視点は、授業者が本時の授業をするにあたってこだわった点を視点として設定された。そうすることで授業本来の改善すべき点が焦点化され、教科専門に偏るのではなく、授業方法に対する協議を図ることができた。

	振り返りのあり方は適切であったか	グループや全体の学び合いは理解が深まる活動であったか
成果	付箋 付箋 付箋 付箋	付箋 付箋 付箋
課題	付箋 付箋	付箋 付箋
改善策	付箋 付箋 付箋	付箋 付箋 付箋

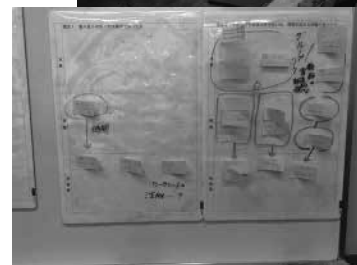


図2 協議の視点と協議用ワークシートのモデル

### 3.2. 研究授業

研究授業は、全ての教員が実施し月に 1 回程度「学び合い」の場面を必ず取り入れた授業を行った。以下に実践された授業の概要を示す。（校内独自での授業研究は含まれない。）

\*展開部の下線部が「学び合い」の場面

【第1回研究授業】令和元年5月29日（水）6限目 授業者：北 周平 講師  
 学年・教科領域： 第3学年 保健体育科  
 单元名：調和のとれた生活  
 展開：

学習活動・内容	授業形態
①前時の振り返り、本時の学習内容を確認する ②生活モデルから人物をイメージさせる 調和のとれた生活について考える	一斉
③モデル人物について知り、悩みの原因を考える (3～4人のグループで原因を報告し合う) ④問題を解決する方法を、既習内容を参考にしながらグループで考える (解決方法は根拠のある具体的な方法を考えるように促す) ⑤各グループの考えを発表する	個人思考 グループ グループ 全体共有
⑥自分の生活を振り返り、改善点・評価点を考える ⑦本時の振り返りを行う	一斉

【第2回研究授業】令和元年7月10日（水）6限目 授業者：茶畑 真子 教諭  
 学年・教科領域： 第1学年 国語  
 单元名：星の花が降るころに  
 展開：

学習活動・内容	授業形態
①前時の振り返り 「私」の心情の変化を探る	一斉
②「私」の心情の変化が読み取れる場面を探す ③「戸部君」の姿は「私」にどううつったかを話し合う	個人 グループ
④「涙」のわけをグループで考える (全体で発表し意見を交流する)	グループ 一斉
⑤ワークシートを使って本時の振り返りをする	個人

【第3回研究授業】令和元年9月24日（火）6限目 授業者：赤井 波季 講師  
 学年・教科領域： 第1学年 英語科  
 单元名：「Unit5 学校の文化祭 Part3 朝食は何かをたずねよう」  
 展開：

学習活動・内容	授業形態
① Greeting ② 高速インプット (How are you?・曜日・天気・日付・whatを使った質問)	一斉 ペア
③ 教師の会話を聞き、どのような内容かを推測する (What do you have for breakfast? - I have toast.)	

④本時の課題を確認する	
What do you ～?を使って友達に質問しよう	
⑤教師の会話の例を使ってペアで質問・応答の練習をする	<u>ペア</u>
⑥与えられたキーワードを使って質問を完成させ、友達に質問する	<u>グループ</u>
⑦質問を全体で共有する	全体
⑧本時のまとめをする	個人

【第4回研究授業】令和元年10月30日（水）6限目 授業者：一角 憲宏 教諭  
 学年・教科領域： 第1学年 理科  
 単元名：物質のすがたとその変化  
 展開：

学習活動・内容	授業形態
予想「袋に入れたエタノールに熱湯をかけると袋はどうなる？」 課題「袋が膨らんだ理由を粒子のモデルを使って説明しよう」 ①課題について予想する	一斉  個人
②前時の復習をする（状態変化と体積、質量の変化） ③実験をする （A:状態変化と粒子の運動 B:液体と気体の粒子の状態） ④ワークシートに粒子モデルをかき、モデル図について説明を 考える ⑤個人の考えを共有し、班のモデル図と説明を考える ⑥発表する（各班の特徴の差異に注意）	<u>グループ A,B</u> 個人  <u>グループ</u> 一斉
⑦まとめ（発表を受け、個人でモデル図と説明文を考える）	個人

【第5回研究授業】令和2年1月22日（水）6限目 授業者：鈴川 健治 教諭  
 学年・教科領域： 第1学年 社会科  
 単元名：オセアニア州  
 展開：

学習活動・内容	授業形態
①オセアニア州の主な国の位置と名称を小テストで確認する ②単元の課題「オーストラリアに行きたいか？」を設定し、は じめの自分の考えを記入する。	個人 一斉
③ゲーム形式でオセアニア州の主な自然地形を確認し、白地図 に記入する。 ④オセアニア州の気候の分布を地形名、国名、方位、緯度、経 度などを使って表にまとめる。 ⑤白地図を使ってオセアニア州の自然地形と気候分布を説明す る。	<u>ペア</u>  一斉

⑥今日の授業の自己評価と理由、授業の初めよりオーストラリアに行きたくなったかとその理由を書く。	個人
---	----

#### 4. 成果と課題

本研究を始めて3年目となるが、この間、教員の異動も少なかったこともあり、研究に対する教員の共通認識も高く、研究内容を1年ごとに深めていくことができた。このことは、教員の指導力だけではなく、生徒の発言力や思考力が育まれていることからそのことが言えると考えられる。小規模校における「学び合い」の難しさは、生徒の人数が少ないと多様な意見が出にくい状況になると安易に考えられるが、その改善のため指導方法の工夫を図っていく必要性を教員がしっかりと認識し、ジグソー法などを取り入れながら研究を進めることができていた。中でも、小規模校の課題は生徒が少ないということだけでなく、教員の数が少ないことも課題の一つと言えよう。中学校現場では、教員が少なくなると1教科を担当する教員が1人で対応することになる。これは、同じ教科を担当する教員がいないことで、教科特有の教科研究が深められないという状況になりがちである。石垣中学校では、この改善のため、授業研究のカンファレンスにおいて共通の視点を設けることで、協議の活性化を図り、他教科であっても授業改善の視点を設けることができていた。このように、同じ教科担当がなくとも小規模の生徒に対する授業方法の改善を日々進めることができたことが、生徒の学力形成に役立てることができていたと考えられる。

今後は、スクールリーダーの研究の方向性の変更や教員の異動等による共通認識の欠如等が課題となる時期が来る恐れも考えられる。特に、教員の人数が少ない場合、その影響力は大きいであろう。これまで培ってきた研究成果の継承がこれらの課題とも言えよう。